

校長研修だより23

生産的な失敗を生む授業

2021・9・6 重枝 一郎

小・中学生対象に行った研究で、

(A) 先生が概念や計算の仕方を教えてからグループ活動させる

(B) グループ活動をしてから先生が概念や計算の仕方を教える

この(A)と(B)どちらの学習効果が高いか？

研究では、課題に取り組み悩んでから教わるクラスは、教わってから課題に取り組むクラスより概念を深く理解し、応用問題で優秀な成績を収めた。そして、グループ活動時に多様な解法を試行錯誤していた生徒ほど、より優秀な成績を示した。

つまり、新しいことを教わる前に、あらかじめ自分の知っている知識をフル活用して、「自分なりの仮説」がうまくいかないこと体感した生徒ほど、新しいことを習うと腑に落ちるといことになる。

このことを“**生産的失敗**”という。失敗を前提に取り組むことを重要視するということがある。私自身、教科指導でも心掛けていたポイントであるが、部活動(サッカー)の指導においても「M(マッチ)T(トレーニング)M(マッチ)」という指導法で「最初のMよりも最後のMで自身の成長実感がもていたらよし！」としていた。目標をもち、まずはやってみることで、そこで体感したしたことを掴んで離さないようトレーニングに取り組む。そうすることで、考えながら走るし、走りながら考える。教科の授業で言えば、思考しながら表現するし、表現しながら思考するということになる。これがよく言われる「思考と表現の一体化」といことになる。

私たち教師は、もしかしたら生徒に失敗させると授業に乗ってこず、その後の学習効果が心配になることは当然の気持ちとしてある。ある人の言葉で、

Ever tried. Ever failed. No matter. Try Again. Fail again. Fail better.

(何度も挑戦した。失敗ばかりした。気にしない。また挑戦。また失敗。よりいい失敗をするんだ)

同じ失敗ばかりでは効果はない。体感したものを掴んで離さないという“生産的失敗”をするとき、失敗から学ぶ方法を上手にデザインすることが大切になる。この大切にすることは、具体的には「対話」になる。失敗し、対話を通じて「自分のなんだろう」を育てていく。対話からアドバイスをもらい、次に「よりいい失敗」をする姿勢をつくるのが生徒の成長を促していく。

夏休みは、部活動で多くの生徒たちのがんばりがあった。大会に参加した生徒に「挑戦、次はもっといい失敗するんだ」という考えで、また意欲を高めさせてほしい。また、9月末には定期考査がある。これもまた同様の考えで、1学期の定期考査からの成長を勝ち取れるようご指導よろしくお願ひします。